

## 中学生におけるキレ行動と欲求の関係

磯 崎 万貴子

### 問題と目的

近年、マスメディアや教育専門雑誌などを見ると、子どもたちの問題行動について「ムカついた」や「キレた」という言葉で表現していることが多く、「普通の子どもが突然キレる」というように「キレ」の特殊性を述べているものも多くある。この「キレ」について牧田・阪・田中（2000）は、中学生を対象に「むかつき」「キレる」に関する意識調査を行ない、対象の中学生の90%近くが「むかつく」ことがあり、40%以上が「キレる」ことがあるという結果を見出している。「キレる」という言葉が子どもにとって日常的に多用されていることを考慮すると、「キレる」という問題行動へ移行しやすいある種の心理状態が子どもたちの内面に存在していると推測することができる。

「キレ」に関する論究は、教育および心理学の分野を中心にして発表されてきているが、心理学からの分析は今日までのところ必ずしも多いとはいえない。「キレ」と「怒り」との差異について和田・加藤（2003）は、①「キレ」という言葉あるいは現象が単に「怒り」という言葉に含意される以上のある種の異常性を含んでいる可能性がある、②「キレ」に日々対峙している教師や家庭裁判所の調査官たちが、近年の「キレ」現象の特殊性を述べている、ということあげている。このことから「キレ」は単なる「怒り」とは異なった特殊な側面をもつ現象である可能性があり、「怒り」とは分けてその現象を取り上げてみる必要があると考えられる。そして実証的研究を行うことで「キレる」ということをより具体的に解明していくための足がかりとなりうると考える。

### 1. 「キレ」の定義

「キレ」の定義づけについては研究者間でさまざまで、共通部分として挙げられるのは「突発的」「衝動的」「何らかの行動を起こす」というものだけである（表1）。これらの定義には互いに異なっている側面を

記述しているものが多く、キレの生起過程全体を想定していないものが多いため各研究で扱われる要因間の関係を考えたりその現象のどの側面を扱っているのか位置づけにくい。

田中・東野（2003）はキレを構成する特徴として、①慢性的なストレス状態にある、②何か契機となる不快な出来事が直前にある、③衝動的・突発的である、④結果として何らかの攻撃行動をとる、の4点を挙げているが、①については国立教育政策研究所（2002）が、キレる子どものパーソナリティー傾向の中に自制心なく衝動的、粗暴である「攻撃型」の存在を示唆しており、①が定義に含まれるとは言い難い。②「契機となる出来事」が存在することは推測できるが、斉藤（1999）は「我慢した挙句に爆発するのではなく、ちょっとしたことで突然怒りだすのが「キレる」の特徴」と言及しており、東京都（1999）が行った中学生との座談会では“学校や親、友達、すべてのものに対しての負の感情が積み重なったときに、たまたまそれに触れた人が被害にあう”という報告がされている。つまり、その内容は周囲のものから見ると非常に些細なことではあるが、少なくとも本人にとっては不快な刺激となりうるものであると考えられる。④については、「何らかの攻撃行動をとる」と一言で表してはいるが攻撃行動にはさまざまな種類があり、キレが衝動性を伴うと仮定すると戦略的な攻撃行動はこれに含まれないことが予想できる。また先に挙げた定義すべてに共通していたことは「何らかの行動を起こす」ことであつたため、キレを攻撃行動に限定せずに考える必要があることが言える。さらに、「（キレると）行動している自分を見つめる内側の目がなくなる」「キレると周囲の状況と自己の関係も切れるため、状況判断ができなくなり、自分本位の行動だけになる」（斉藤，1999）など、その場の状況やルールに合うような形で行動化できていないということが最近の「キレる」に対する問題意識につながっていると考えられる。

これらの点をふまえて再度「キレ」について整理すると、キレは「その人にとって不快となる刺激によつ

表1 各研究におけるキレの定義

文 献	定 義
宗内 (1998)	鬱積したコンプレックスが外的な刺激によって突発的に爆発的な攻撃行動を生む過程および結果
崔 (1998)	自分にとって不快なことを無理に押さえ込んでいた状況で何かをきっかけに自分の感情を普段とは異なる形で表す行為
山入端 (1998)	挑発的経験・イライラ状態において衝動的攻撃動機に基づいて起こる見境ない攻撃行動
小林 (1998)	場の状況や文脈にそぐわない、激しい突発的な攻撃行動
東京都 (1999)	何かのきっかけで、頭の中が真っ白になり、前後の出来事を覚えていない、または通常ではありえない行動に移ってしまう状態
牧田ら (2000)	周囲のものが予想しにくい状況で突発的、衝動的に怒りが表出されることであり、どちらかといえば苦痛の感情によって生じる現象
牧田ら (2002)	何らかの刺激によって急激な怒りが引き起こされ、激情に任せて行動化してしまうこと
下坂ら (2000)	あることを契機に自己の衝動性を統制できなくなって起こす行動
成田ら (2001)	何らかのストレスに対して自分を抑えてきた感情が限界に達して我慢しきれなくなり、自分の気持ちを爆発させていわゆる不適応行動を起こしてしまうこと
山崎 (2002)	長期にわたる不表出性攻撃傾向が急に極端な 表出性攻撃に至る現象
和田・加藤 (2003)	人が何かを我慢している (あるいはさせられている) 状態にある。そしてある時点でさらに欲求不満にさせる出来事が起こる。その結果、その人のその時点までのふるまいと連続性が途切れるように見える形で、怒りに関連した深い感情が生起し、自己の統制ができなくなる。そして、多くの場合は相手への身体的攻撃や相手以外の他者や物への攻撃を行ってしまう。

て急激な怒りが引き起こされ、場の状況や文脈にそぐわない激情に任せた衝動的な行動をとってしまうこと」、つまり①不快感情を引き起こすきっかけとなる刺激、②不快感情、③衝動的行動の3つの観点で表すことができる。

## 2. 「キレ」の発生要因

キレの発生要因に関しては実証的な研究は少なく、理論的考察として述べられるに留まっているものが多い。国立教育政策研究所 (2002) の調査では、キレる子どものパーソナリティー傾向として「耐性欠如型」「攻撃型」「不満型」の3つを指摘している。田中・東野 (2003) は学校要因に関して、国立教育政策研究所 (2002) の結果や東京都 (1999) の結果等から考察し、大きく分けて「友人との関係」「教師の不適切な対応」「学業面の問題」「制度や教育方針」の4つがキレに影響を与えうるものと述べている。大石 (1998) は「キレる」子どもたちの心の背景にある状況要因に関して、社会・文化の現代的傾向、仲間関係の特質、親子関係の変化という3つの観点で考察している。その中で大石 (1998) はキレについて、周囲との表層的な関係から生じる孤独感や不安感に加えて周囲との同質性を保たねばならない傾向が強い社会の動向が導いた「慢性的な我慢の状態」に起因していると考察している。また松本 (2001) は、親の養育態度とキレる非行に至るまでの情動反応について考察している。それ

によると、養育態度が冷淡で拒否的な場合 (心理的虐待)、幼児期には寂しさと孤独感を味わい児童期にはさらにそれらが増強され、思春期青年期には愛情欲求不満、対人不信感、孤独感が増強されて、家出や売春、暴走などのキレる非行に至り、一方養育態度が過剰期待である場合には、幼児期ではよい子思考で不快・不満はないが、児童期になると遊びなどへの欲求不満・疎外感を抱き、思春期青年期には欲求不満・不快感が増強され、さらに劣等感・挫折感から恨みや怒りの感情が生起し、家庭内暴力や暴走などのキレる非行に至ると示唆している。

これらのことから子どもたちの「キレる」根底にある問題行動を示しやすい心理状態に関して、ある種の欲求の状態を上げることができる。先行研究からそれらは親に対する救護欲求の強さ、教師・友人に対する承認欲求の強さ等を推測することができる。欲求は「人間が内外の刺激の影響を受けて行動を駆り立てられる過程 (動機付け) の一つで、行動を発現させる内的状態」 (中島ら, 1999) であり個人の欲求の状態はその個人のパーソナリティー特性や行動特性に影響するものと考えられる。

一方、キレの生起過程については Berkowitz の攻撃についての不快情動説で説明できると考えられる。不快情動説は、「嫌悪事象によって産み出された不快感情が攻撃動因を自動的に活性化し、攻撃反応に至る」というもので、ドラードら (1959) の欲求不満-攻撃

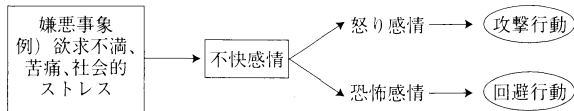


図1 Berkowitzによる不快情動説のプロセス

仮説をより複雑なアプローチへ発展させたものである（図1）。

不快情動説における嫌悪事象には欲求不満、苦痛、社会的ストレス等が含まれる。個人の欲求の状態は特に欲求不満をどのように受け取るかということや欲求不満の感じやすさに関係すると考えられる。欲求が強ければ強いほど、すなわちそれに対する思いが強ければ強いほど不満は感じやすくなると考えられる。そして大淵（2000）が Berkowitz の理論をもとに衝動的攻撃の心理過程について説明していることもあり、突発的・衝動的な行動特徴を持つキレ行動を Berkowitz の理論で説明することができるといえる。つまり、欲求の強さが欲求不満を感じやすくさせると仮定した場合、欲求が強くなると不快感情も喚起されやすい状態になり、突発的・衝動的なキレ行動を起こさせやすいと考えることができる。

### 3. 測定尺度

キレについては教育現場で取り上げられる事が多く、実際に現場で生徒のキレ行動に対応するのは教職員である。そこで本研究ではキレを表す3つの観点のうち、教職員が客観的に観察可能である③の行動に注目して見ていくこととする。和田・加藤（2003）はキレ過程について5つの下位過程を想定し「キレ」の素朴概念の質的研究を行った。その下位過程の中の「キレたときの行動」の内容を見ると、反社会的行動や陰湿な攻撃などが含まれており、「キレ」の特徴のひとつと考えられる衝動性に反している回答がなされていたり、外部との関係を絶つ反応も含まれており、問題行動であるキレ行動の中に対処行動とも受け取れる内容を含めていた。また、下坂ら（2000）は「キレ行動尺度」を作成し「間接的攻撃」「直接的攻撃」「パニック状態」「反社会的行動」の4因子を見出したが説明率の低さに問題があり、因子内で攻撃行動と対処行動の区別がされていないため「～攻撃」という因子名をつけられたキレ行動として扱うには疑問の残る項目が多く、改良の余地がある。

欲求については、中学生の生活場面はそのほとんどが家庭と学校であり、それぞれに求める欲求も異なっていることが予想できるが、これまでの欲求に関する

尺度は一般的な欲求を測定するもので領域は想定されていない（Edwards, 1970；斎藤・荻野, 1994）。唯一、領域（家庭・学校・社会）を想定して作成されたものが三好ら（1988）の「新訂版基本的欲求検査」であるが、9つの欲求それぞれに属するだろうと三好ら自身が考え出した項目で構成されておりこれらについて因子分析等を用いて吟味していないという作成方法の問題点が指摘できる。このように今日中学生の生活場面に合わせた欲求を全般的に扱っている信頼性の高い尺度は見当たらない。

### 4. 目的

本研究は、キレ行動を怒りを伴う攻撃の一種と見て、怒りから生じる他の行動と比較することによってキレ行動と欲求の関係をより明確にしていこうことを目的とする。本研究を実施するに当たって、研究対象となる「キレ行動」を把握するための尺度および「欲求」の尺度が必要となる。そこでまず予備調査1として、キレ行動がどのような行動なのか明確にするために、怒りによって生じる行動を設定した上でキレ行動として教職員内で一致して判断される行動を明らかにする。さらに予備調査2として中学生の欲求の中でも攻撃行動と関連があると考えられる欲求について測定できる尺度の作成を試みる。

#### 予備調査1

##### 目的

キレ行動が発生する前提となる怒りに伴って生じる行動として、「キレ行動」以外に「非キレ行動」「対処行動」「その他の行動」があり、キレ行動を怒りから生じる他の行動と区別するために予備調査1では教職員が客観的に観察可能である生徒・児童のこれらの「行動」に注目し、教職員内で一致して判断される行動をそれぞれ明らかにする。

##### 方法

対象：兵庫県内、大阪府内の教職経験者78名（小学校教諭28名、中学校教諭50名）

質問紙：怒り感情に対して行なう行動について、先行研究（下坂ら, 2000；秦, 1999；柴田ら, 2002；濱口, 2002；安藤ら, 1999；鈴木・春木, 1994；久木山ら, 2001）を参考にして、攻撃行動と対処行動を含めた項目（全64項目）を研究者自ら作成した。

手続き：それぞれの項目について、その行動が、キレ

ていると判断できる行動「キレ行動」なのか,「キレではない攻撃行動」なのか,「怒りに対する対処行動」なのか,「その他の行動」なのか,4つのうちから一

**表2** キレ行動, 攻撃行動の項目として扱えるもの, どちらともつかない項目, 対処行動として扱える項目 (N=78)

キレ行動 (%) : 8項目	
40.	逆上している (87.2)
14.	怒り狂っている (85.9)
16.	カッとなり我慢できなくなる (76.9)
32.	パニック状態になる (76.9)
34.	何も判らなくなる (76.9)
10.	人を殴る (75.6)
5.	腹を立てて, 人を蹴る (74.4)
55.	ひどく怒って乱暴する (71.8)
キレ行動とも攻撃行動とも区別のつかなかったもの (キレ% - 攻撃%) : 9項目	
56.	物を壊す (66.7-29.5)
28.	相手を物で殴る (64.1-35.9)
39.	暴れる (62.8-35.9)
23.	相手に物を投げつける (50.0-50.0)
58.	かんしゃくを起こす (48.7-41.0)
11.	物にやつあたりする (48.7-37.2)
24.	相手をたたいたりする (46.2-50.0)
15.	相手の胸倉をつかむ (46.2-52.6)
6.	ドアをばたんと閉めるような, 荒々しいことをする (41.0-44.9)
攻撃行動 (%) : 7項目	
61.	皮肉や悪口を面と向かって言う (82.1)
62.	相手をにらみつける (82.1)
57.	相手を精神的に徐々に追い込んでいく (80.8)
33.	相手の邪魔をする (75.6)
4.	口汚くののしる (73.1)
3.	相手を怒鳴りつける (70.5)
44.	相手が嫌われるような噂話をする (69.2)
対処行動 (%) : 21項目	
45.	友達と喋って気分転換をする (98.7)
25.	友達や家の人に相談する (96.2)
12.	怒りを抑える (94.9)
49.	気を静めて, 相手を理解しようとする (94.9)
64.	相手に自分の気持ちを伝える (93.6)
9.	自分の行動を抑制する (92.3)
26.	相手の良いところを思い出す (92.3)
31.	気を静めて, かんしゃくを起こさないようにする (92.3)
46.	相手に「やめて」と言う (92.3)
41.	キレた後の自分や相手, 周りの人のことを考える (91.0)
8.	キレてはいけなさと自分に言い聞かせる (89.7)
42.	けんかになった場合に自分と相手がどうなるかを考える (89.7)
59.	自分が悪いかもしれないと考える (89.7)
50.	楽しいことを考える (88.5)
2.	なぜそのようになったのかを考え直す (87.2)
60.	その出来事を忘れようとする (87.2)
52.	腹を立てたりせず, 我慢する (82.1)
1.	友達に愚痴を言う (78.2)
7.	人から離れて一人になる (76.9)
36.	すぐにその場を立ち去る (76.9)
20.	心の中では煮えくり返っていても, それを外には出さない (70.5)

つを教職員それぞれの判断で選んでもらった。

## 結果と考察

各行動項目について選択率が全体の70%以上となった行動を4つの代表的行動として採用することとした(表2)。キレ行動として8項目, キレとはいえない攻撃行動として7項目, 対処行動として21項目が選ばれた。キレ行動と, キレ行動ではない攻撃行動であると判断されたものを比較すると, キレ行動ではない攻撃行動はその行動の対象となる相手が明確であるのに対してキレ行動は対象となるものがはっきりしないものがほとんどであった。また, 項目内容をみるとキレ行動では制御不能な状態や身体的攻撃が選ばれたのに対して, キレ行動ではない攻撃行動では間接的攻撃や言語的攻撃など戦略的で非身体的攻撃行動が選ばれた(よって「キレ行動ではない攻撃行動」は以下「非身体的攻撃行動」と表現する)。これらのことから, 感情や行動のコントロールが制御不可能な上行動の対象があいまいで身体的攻撃行動を伴うものを教職員は「キレ行動」とみなしていると言える。また, 今回の調査では客観的にみたキレに注目したため項目内容で「きっかけとなる刺激」については考慮しなかった。キレ行動か攻撃行動か区別のつけられなかった行動が9項目あったことに関してはこのきっかけとなる刺激や出来事などの状況によってどちらに判断されるかが決まるものと考えられる。

## 予備調査2

### 目的

中学生の欲求の中でも攻撃行動と関連があると考えられる欲求について, 家庭領域と学校領域それぞれで測定できる欲求尺度の作成を試みる。

### 方法

**対象:** 兵庫県内の中学生(1~3年生)113名のうち有効回答者数101名(男子58名, 女子43名)

**質問紙:** 領域は三好ら(1988)の「家庭・学校」を用い, 欲求の種類や項目に関しては主にMurray(1961)やEPPS, 先行研究(斎藤・荻野, 1994; 磯崎, 2002)をもとに, 各領域の項目として合うように修正し, 13欲求(達成, 顕示, 自律, 親和, 救護, 支配, 養護, 異性愛(学校領域のみ), 攻撃, 承認, 遊戯, 獲得, 回避)全100項目からなる質問紙を作成した。

手続き：それぞれの項目について普段の自分にどの程度あてはまっているかを「非常によくあてはまる～全然あてはまらない」の5件法で、評定を求めた。

## 結果

家庭領域 47 項目、学校領域 53 項目について領域別に因子分析（主因子解，プロマックス回転）を行なった。解釈可能性を考慮して家庭は 3 因子，学校は 6 因子とした。家庭領域，学校領域いずれに関しても，どの因子にも高い負荷量を示さなかったものと 2 因子以上にまたがって高い負荷量を示したものを削除し（家庭：15 項目，学校：14 項目），再度因子分析を行なった。

その結果，家庭領域では 3 因子抽出し，第 1 因子は「家の人が困っている時は助けてあげたい」や「家族みんなで協力していきたい」「家族と楽しい時間を過ごしたい」など家族との温かい関係を求める項目に負荷が高かったことから「親和・愛情欲求」とし，第 2

因子は「殴られたら殴り返したい」や「お小遣いをもっとたくさん欲しい」「家の中では自分の思い通りに行動したい」など家族に対する攻撃性や家の中で自由を求める項目に負荷が高かったことから「自由・攻撃欲求」とし，第 3 因子は「怖い罰を受けないようにしたい」や「両親からもっと認められたい」「ひとりでできるようになりたい」など家の人に認められ独立することを求める項目に負荷が高かったことから「承認・独立欲求」とした。またクローンバックの  $\alpha$  係数を算出したところ各因子とも 0.80 以上の内的整合性が認められた（表 3-1, 3-2）。

学校領域では 6 因子を抽出し，第 1 因子は「友達か

表 3-2 家庭領域因子相関行列（N=101）

因子	1	2	3
1	1.00		
2	0.00	1.00	
3	0.56	0.29	1.00

表 3-1 家庭領域の欲求因子分析結果（N=101）

	因子 1 親和・愛情	因子 2 自由・攻撃	因子 3 承認・独立
7 家の人が困っているとき，助けてあげたい	<b>0.83</b>	0.02	-0.19
20 家の人が病気になったときは，はげまし助けてあげたい	<b>0.83</b>	0.11	-0.30
18 困っているとき，家の人にはげましてもらいたい	<b>0.82</b>	0.11	-0.03
4 家のことは，家族みんなで協力してやっていきたい	<b>0.74</b>	-0.07	-0.21
5 病気になったとき，両親や兄弟からいたわってもらいたい	<b>0.74</b>	0.14	-0.12
17 もっと両親や兄弟のためになることをしたい	<b>0.73</b>	0.02	0.01
37 家族と楽しい時間をもっと過ごしたい	<b>0.57</b>	-0.23	0.35
44 兄弟から親切にしてもらいたい	<b>0.56</b>	-0.18	0.32
31 困っているときは，家の人に同情され，助けてもらいたい	<b>0.56</b>	-0.05	0.21
46 家の中がもっと穏やかになるように，自分にできることをやっていきたい	<b>0.47</b>	-0.09	0.16
41 家族の中ではいつも自分が注目の的でありたい	<b>0.46</b>	0.07	-0.06
52 両親や兄弟から，嫌われないようにしたい	<b>0.45</b>	0.01	0.29
1 家のお手伝いなど，やろうと決めたことは辛くても最後までやり遂げたい	<b>0.42</b>	-0.27	0.06
9 家の人になぐられたら，なぐり返したくなる	-0.13	<b>0.74</b>	-0.16
12 家がお金持ちであって欲しい	-0.02	<b>0.69</b>	-0.13
38 両親には欲しいものは何でも買ってもらいたい	0.05	<b>0.65</b>	-0.03
22 家の人から，自分には納得できない扱いを受けると，相手に攻撃したくなる	0.01	<b>0.63</b>	0.19
25 お小遣いをもっとたくさんほしい	0.04	<b>0.62</b>	-0.22
6 家の人を説得して，自分がやりたいと思っていることをやらせたい	0.12	<b>0.62</b>	0.13
35 家の人に対して非常に腹が立つと，物を投げたり，壊したくなる	0.03	<b>0.61</b>	0.08
3 家の中では，自分の思い通りに行動できるようになりたい	0.05	<b>0.50</b>	0.14
14 何かしているときは，家の人に邪魔されたくない	-0.05	<b>0.49</b>	0.10
42 家では，責任や義務は避けて，思うとおりにやりたい	-0.09	<b>0.45</b>	0.16
26 家の人から怖い罰を受けないようにしたい	-0.22	0.00	<b>0.82</b>
27 家の人に宿題を手伝ってもらわなくても，ひとりでできるようになりたい	-0.18	-0.23	<b>0.66</b>
32 自分の意見を両親や兄弟に反対されたら，自分の立場を弁護したい	-0.14	0.19	<b>0.62</b>
30 家でのけものにされないようにしたい	0.05	-0.08	<b>0.56</b>
23 両親からもっと認められたい	0.14	0.11	<b>0.53</b>
36 両親から，自分が信頼できる人間だともっと思われたい	0.26	0.09	<b>0.53</b>
49 家の人に，自分のやってきたことについて認めてもらいたい	0.17	0.25	<b>0.50</b>
10 家の人に，もっと自分の意見や話を聞いてもらいたい	0.00	0.20	<b>0.47</b>
13 両親からがみがみ言われなくようにしたい	-0.03	0.25	<b>0.46</b>
$\alpha$ 係数	0.91	0.85	0.83

ら信頼され、悩みを打ち明けられるような人になりたい」や「友達ともっと親密になりたい」など友達との温かい交流を求める項目に負荷が高かったことから「友人に対する親和欲求」、第2因子は「グループの中で注目的になりたい」や「所属している集団のリーダー格になりたい」など周囲からの注目を集めたり自己主張に関する項目に負荷が高かったことから「顕示欲求」、第3因子は「困難を克服して頑張りたい」や「成績がよくなるようにしっかり勉強したい」など物事に対して最後まで成し遂げたいという項目に負荷が高かったことから「達成欲求」、第4因子は「挑発されたら相手を殴りたい」など攻撃性に関する項目に負荷が高かったことから「攻撃欲求」、第5因子は「友達からいじめられないようにしたい」など周囲から拒

絶されることを回避する項目に負荷が高かったことから「拒否回避欲求」、第6因子は「勉強をもっと減らして欲しい」「もっとのんびり暮らしていきたい」などやらなければならないことから逃れたいという項目に負荷が高かったことから「気楽欲求」とそれぞれ命名した。またクロンバックの $\alpha$ 係数を算出したとこ

表 3-4 学校領域因子相関行列 (N=101)

因子	1	2	3	4	5	6
1	1.00					
2	0.58	1.00				
3	0.40	0.37	1.00			
4	0.11	0.18	0.06	1.00		
5	0.50	0.46	0.22	0.05	1.00	
6	0.27	0.12	0.08	0.23	0.00	1.00

表 3-3 学校領域の欲求因子分析結果

	因子1 友人との 親和	因子2 顕示	因子3 達成	因子4 攻撃	因子5 拒否 回避	因子6 気楽
59 友達から信用され、悩みを打ち明けられるような人になりたい	<b>0.98</b>	-0.15	0.00	0.15	-0.14	-0.23
95 友達にはできる限りの友情を示したい	<b>0.87</b>	0.05	0.12	-0.03	-0.27	0.00
84 友達が困っているようなときには、助けてあげたい	<b>0.87</b>	-0.13	0.13	-0.13	-0.33	0.16
74 友達から信頼され、好かれたい	<b>0.83</b>	0.00	-0.06	0.03	0.04	0.10
57 友達からあたたかい気持ちで接してもらいたい	<b>0.74</b>	0.14	-0.17	0.11	0.06	-0.12
69 友達ともっと親密になりたい	<b>0.73</b>	-0.09	-0.09	-0.02	0.13	0.11
56 本当に良い友達を作りたい	<b>0.69</b>	-0.22	0.00	0.06	0.23	0.04
97 学校で、できるだけ多くの人から好かれたい	<b>0.60</b>	0.23	-0.07	-0.07	0.10	0.06
83 友達が何か行なっているとき、そのやり方について教えてあげたい	<b>0.58</b>	0.07	0.25	-0.02	-0.19	-0.05
93 一人で何かするよりも、友達と協力してやるほうが好きである	<b>0.56</b>	0.04	0.11	-0.10	0.01	0.19
86 友達からもっと認められたい	<b>0.52</b>	0.19	-0.08	-0.08	0.29	0.08
81 互いに親切で、仲の良いグループに加わりたい	<b>0.49</b>	0.01	0.08	-0.13	0.39	-0.02
94 困っているとき、友達から同情され、理解されたい	<b>0.46</b>	0.19	-0.09	0.03	0.28	-0.04
67 グループの中で注目的になりたい	0.02	<b>0.83</b>	0.18	-0.02	-0.21	0.03
54 学校で、自分の容姿について注目されたり、話題にされるのが好きである	-0.11	<b>0.82</b>	-0.05	-0.07	-0.06	-0.10
58 自分が所属している集団のリーダー格になりたい	-0.06	<b>0.82</b>	0.07	0.03	-0.20	0.15
45 グループ活動の決定は自分がやりたい	0.00	<b>0.70</b>	-0.09	0.14	-0.04	-0.01
91 友達や先生から「すごい」と思われるようなことがしたい	-0.02	<b>0.51</b>	0.24	0.02	0.27	0.03
79 クラスのみんながアツと驚くようなことをやってみたい	0.27	<b>0.42</b>	0.00	0.07	0.15	-0.18
34 異性から、自分が魅力的な人だと思われたい	0.20	<b>0.40</b>	-0.22	0.07	0.12	-0.03
78 目標を決めて勉強を始めたら、困難があっても克服して頑張りたい	0.13	-0.08	<b>0.81</b>	0.08	0.08	-0.13
66 学校の成績が良くなるように、もっとしっかり勉強したい	0.02	-0.12	<b>0.76</b>	0.04	0.14	-0.07
53 学校の勉強や仕事は徹底的に納得の行くまでがんばってやりたい	-0.09	0.15	<b>0.63</b>	-0.09	0.04	-0.05
90 クラブの練習や試合など、どんなに苦しくても最後までやり遂げたい	-0.03	0.05	<b>0.44</b>	0.06	0.02	0.12
96 友達に挑発されたら、相手をなぐりたい	-0.03	0.09	0.08	<b>0.80</b>	0.01	-0.11
85 友達や先生に対して非常に腹が立つと、学校でも物を投げたり壊したくなる	0.00	0.01	-0.08	<b>0.72</b>	-0.08	0.16
73 友達や先生から、自分には納得のできない扱いを受けると、相手に攻撃したくなる	0.07	0.00	-0.03	<b>0.67</b>	-0.02	0.14
61 友達や先生から馬鹿にされたら、仕返しをしたい	-0.03	0.01	0.09	<b>0.63</b>	0.15	0.01
77 友達からいじめられないようにになりたい	-0.16	-0.15	0.08	0.04	<b>0.93</b>	0.11
89 友達から仲間はずれにされたくないで嫌われないようにしたい	0.23	-0.09	0.11	0.04	<b>0.67</b>	-0.10
100 先生から怒られないようにしたい	-0.05	0.07	0.31	-0.11	<b>0.37</b>	0.18
63 やらなければならない勉強をもっと減らして欲しい	0.07	0.07	-0.09	-0.16	0.12	<b>0.73</b>
98 勉強をやめて、もっとのんびり暮らしていきたい	0.02	-0.04	-0.15	0.03	0.03	<b>0.65</b>
75 勉強などに縛られずに、自由に思い通りの生活をしていきたい	0.09	-0.04	0.07	0.25	-0.04	<b>0.62</b>
87 学校のことでもっと休みが欲しい	-0.08	-0.05	0.12	0.22	0.05	<b>0.56</b>
$\alpha$ 係数	0.94	0.85	0.77	0.81	0.71	0.76

ろ、各因子とも 0.70 以上の内的整合性が認められた (表 3-3, 3-4)。

## 本 調 査

### 目的

中学生の怒りに対する行動の中で、特にキレ行動と中学生の欲求との関係を明らかにすることを本調査目的とする。

Berkowitz の理論に基づいて本調査でのキレ行動の生起過程と本調査内容を示すと図 2 のようになる。

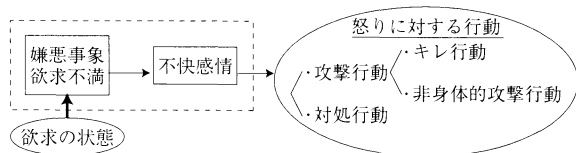


図 2 本研究でのキレの生起過程と調査内容 (点線枠内は場面設定を行なった)

予備調査 1 でキレ行動の他に非身体的攻撃行動、対処行動が得られたが、これらを対比することでキレ行動の性質をより明らかにすることが可能であると判断し、キレ行動の他に怒りに対する行動として非身体的攻撃行動と対処行動を設定する。キレ行動は相手があいまいで衝動的、直接的な攻撃行動を特徴としていたのに対して、非身体的攻撃行動は戦略的で間接的な攻撃行動を特徴としており攻撃対象との関係性を考慮しながら行なう攻撃であることがわかった。このことから、非身体的攻撃行動に比べてキレ行動は感情や行動を制御できないほどの強い怒り感情が関係していると考えられ、欲求不満の状態も強いことが考えられる。不満が強いということは、それに対する思いが強いこと、すなわち欲求が強いことを表し、従って非身体的攻撃行動に比べてキレ行動にはより強く欲求の状態が関係していると考えられる。また、怒り感情を制御することが困難なキレ行動に対して対処行動は怒り感情を制御し認知を変化させたりすることでうまく怒りを発散させることができたり相手との関係を改善に向かわせようという行動であり、キレ行動とは反対の意味を持つ行動であることが推測できる。

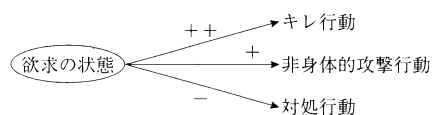


図 3 欲求の状態と行動の関係 (仮説)  
(+は正の関係、-は負の関係を表し、その数は関係の強さを表す。)

以上の仮説を図 3 にまとめた。

### 方法

対象：兵庫県、大阪府内の中学生 (1~3 年生) 425 名のうち有効回答者数 318 名 (男子 168 名、女子 150 名)

質問紙：①欲求に関する質問紙；予備調査 2 で得られた家庭領域 (3 欲求) 32 項目、学校領域 (6 欲求) 35 項目を用いた。それぞれの項目について普段の自分とどの程度あてはまっているかを「全然あてはまらない～非常によくあてはまる」の 5 件法 (1~5 点) で回答を求めた。②怒り行動尺度；予備調査 1 で得られたキレ行動 8 項目、攻撃行動 7 項目、対処行動 9 項目 (表 2 中の 12, 25, 31, 41, 45, 49, 50, 60, 64) 全 24 項について中学生が答えられるような表現に変えて用いた (付表 1)。

教示：「日常生活の中には自分にとって納得のいかないことや気に入らないこと、傷付いたと感ずることがあり、それによって腹が立つことがあります。」と教示文で状況を設定した後、「あなたは、そのような状況の時に下に書いてあるような行動をどのくらい行いますか。普段のあなた自身が一番近いところに○印をつけて下さい」と教示し、「全然ない～よくある」の 4 件法 (1~4 点) で回答を求めた。

### 結果

#### 〈各尺度の因子分析〉

##### 1. 欲求尺度因子分析

家庭領域 32 項目、学校領域 35 項目から、得点分布に偏りが見られた項目 (家庭 2 項目：「何かしているときは、家の人に邪魔されたくない」「家族の中ではいつも自分が注目の的でありたい」、学校 4 項目：「学校で、自分の容姿について注目されたり、話題にされるのが好きである」「本当によい友達をつくりたい」「自分が所属しているグループのリーダー格になりたい」「グループの中で注目の的になりたい」) を削除して、家庭 30 項目、学校 31 項目を用いて領域ごとに因子分析を行った (主因子解、プロマックス回転)。予備調査 2 の結果と解釈可能性を考慮して、家庭領域では 3 因子、学校領域では 6 因子とした。どの因子にも高い負荷量を示さなかった項目 (家庭 1 項目、学校 2 項目) を削除し再度因子分析を行なったところ、両領域とも各因子の項目内容は予備調査結果とほぼ同様のものとなった (家庭領域結果：表 4-1, 4-2, 学校領域結果：表 4-3, 4-4)。

表4-1 家庭領域の因子分析結果 (N=318)

	因子1	因子2	因子3
親和・愛情欲求 ( $\alpha=.89$ )			
家の人が病気になったときは、励まし助けてあげたい	<b>0.92</b>	0.07	-0.25
家の人が困っているとき、助けてあげたい	<b>0.88</b>	-0.03	-0.20
もっと両親や兄弟のためになることをしたい	<b>0.75</b>	-0.11	0.00
病気になったとき、両親や兄弟からいたわってもらいたい	<b>0.66</b>	0.21	-0.01
困っているとき、家の人に励ましてもらいたい	<b>0.65</b>	-0.04	0.17
家のことは、家族みんなで協力してやっていきたい	<b>0.64</b>	-0.09	0.04
家族と楽しい時間をもっと過ごしたい	<b>0.63</b>	-0.07	0.19
困っているときは、家の人に同情され、助けてもらいたい	<b>0.42</b>	-0.09	0.37
家のお手伝いなど、やろうと決めたことはつらくても最後までやり遂げたい	<b>0.42</b>	-0.05	-0.01
兄弟から親切にしてもらいたい	<b>0.37</b>	0.11	0.26
自由・攻撃欲求 ( $\alpha=.82$ )			
両親にはほしいものは何でも買ってもらいたい	0.20	<b>0.73</b>	-0.10
家の人から、自分には納得できない扱いを受けると、相手に攻撃したくなる	-0.07	<b>0.73</b>	-0.06
家がもっとお金持ちであってほしい	0.11	<b>0.60</b>	-0.08
家の人に対して非常に腹が立つと、物を投げたり、壊したくなる	-0.09	<b>0.58</b>	-0.01
家の人に殴られたら、殴り返したくなる	-0.18	<b>0.57</b>	-0.03
お小遣いをもっとたくさんほしい	-0.15	<b>0.53</b>	0.10
家では、責任や義務は避けて、思うとおりにやりたい	-0.07	<b>0.52</b>	0.01
家の中では、自分の思い通りに行動できるようになりたい	0.00	<b>0.52</b>	0.12
家の人を説得して、自分がやりたいと思っていることをやらせたい	0.16	<b>0.45</b>	0.03
承認・独立欲求 ( $\alpha=.84$ )			
家でのけものにされないようになりたい	-0.03	-0.03	<b>0.74</b>
家の人から恐い罰を受けないようにしたい	-0.15	0.05	<b>0.72</b>
家の人に宿題を手伝ってもらわなくても、一人でできるようになりたい	-0.12	-0.20	<b>0.64</b>
両親から、自分が信頼できる人間だともっと思われたい	0.16	0.05	<b>0.59</b>
両親や兄弟から、嫌われないようにしたい	0.28	-0.09	<b>0.52</b>
自分の意見を両親や兄弟に反対されたら、自分の立場を弁護したい	-0.03	0.19	<b>0.46</b>
両親からもっと認められたい	0.25	0.15	<b>0.46</b>
両親からがみがみ言われたいようにしたい	-0.08	0.28	<b>0.40</b>
家の人に、自分のやってきたことについて認めてもらいたい	0.26	0.06	<b>0.39</b>
家の中がもっと穏やかになるように、自分にできることをやっていきたい	0.29	0.00	<b>0.37</b>

表4-2 家庭領域各因子相関行列 (N=318)

因子	1	2	3
1	1.00		
2	-0.04	1.00	
3	0.60	0.32	1.00

## 2. 怒り行動尺度

怒り行動尺度 24 項目について因子分析を行った (主因子法, プロマックス回転)。予備調査 1 の結果と解釈可能性を考慮して 4 因子構造とした。どの因子にも高い負荷量を示さなかった 4 項目を削除し再度因子分析を行った (主因子法, プロマックス回転) (表 5-1, 表 5-2)。第 1 因子は「パニックになる」, 「気持ちに任せて取り乱す」, 「ひどく腹が立って乱暴する」など予備調査 1 で教職員が判断したキレ行動に関する項目で負荷が高かったことから「キレ行動」とした。第

2 因子は「相手が嫌がるような噂話をする」, 「精神的に追い込む」, 「相手の邪魔をする」など戦略的で非身体的攻撃を行う項目で負荷が高かったことから「非身体的攻撃行動」とした。第 3 因子は怒りに対して自らの認知を変えようとしたり相手と相談したりするなど積極的な対処行動に関する項目で負荷が高かったことから「積極的対処行動」とした。第 4 因子は怒りに対して我慢する項目に負荷が高かったことから「怒り抑制行動」とした。またクロンバックの  $\alpha$  係数を算出したところ, 各因子とも .66 以上の内的整合性を示した。

因子相関行列をみると, 第 1 因子と第 2 因子の間で .66 の値を示し中程度の相関があったのに対し, 第 1 因子と第 3 因子そして第 4 因子ではそれぞれ相関はほとんどなかった。

予備調査 1 で教職員を対象に行った怒り行動項目の分類結果と因子分析で得られた 4 因子の内容を比較す



表 4-3 学校領域の欲求尺度因子分析結果 (N=318)

	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4	因子 5	因子 6
親和欲求 ( $\alpha = .92$ )						
友達にはできる限りの友情を示したい	<b>0.99</b>	-0.05	0.01	0.03	-0.06	-0.24
友達が困っているようなときには助けてあげたい	<b>0.81</b>	0.03	-0.03	0.10	-0.26	-0.04
友達から信頼され、好かれない	<b>0.75</b>	-0.11	-0.04	-0.10	0.28	-0.01
一人で何かするよりも友達と協力してやるほうが好きである	<b>0.75</b>	0.02	-0.04	-0.11	-0.18	-0.08
友達ともっと親密になりたい	<b>0.67</b>	0.01	-0.04	0.06	0.12	-0.04
友達から信用され、悩みを打ち明けられるような人になりたい	<b>0.64</b>	-0.03	-0.02	0.01	0.08	0.13
友達からあたたかい気持ちで接してもらいたい	<b>0.63</b>	-0.09	0.05	0.07	-0.01	0.22
困っているとき、友達から同情され、理解されたい	<b>0.57</b>	0.09	-0.06	-0.08	0.05	0.07
学校でできるだけ多くの人から好かれない	<b>0.54</b>	-0.03	0.08	-0.05	0.36	0.00
友達からもっと認められたい	<b>0.52</b>	0.04	0.03	-0.03	0.19	0.16
友達が何か行っているとき、そのやり方について教えてあげたい	<b>0.45</b>	0.05	0.02	0.25	-0.04	0.04
友達から仲間はずれにされたくないで嫌われないようにしたい	<b>0.45</b>	0.02	-0.01	-0.06	-0.01	0.40
攻撃欲求 ( $\alpha = .82$ )						
友達や先生から馬鹿にされたら、仕返しをしたい	-0.12	<b>0.79</b>	-0.08	0.00	-0.01	0.15
友達や先生から、自分には納得のできない扱いを受けると、相手に攻撃したくなる	0.02	<b>0.74</b>	0.01	-0.08	0.03	0.10
友達に挑発されたら、相手を殴りたい	-0.10	<b>0.71</b>	0.06	0.07	0.11	-0.14
友達や先生に対して非常に腹が立つと、学校でも物を投げたり壊したくなる	0.22	<b>0.63</b>	0.09	0.02	0.04	-0.24
気楽欲求 ( $\alpha = .73$ )						
勉強をやめて、もっとのんびり暮らしていきたい	-0.09	-0.07	<b>0.89</b>	0.12	-0.03	-0.10
勉強などに縛られずに、自由に思い通りの生活をしていきたい	0.14	0.06	<b>0.55</b>	-0.09	-0.10	0.12
やらなければならない勉強をもっと減らしてほしい	0.03	0.06	<b>0.53</b>	-0.21	-0.02	0.05
学校のことでもっと休みがほしい	-0.12	0.04	<b>0.52</b>	0.01	0.04	0.10
達成欲求 ( $\alpha = .71$ )						
学校の勉強や仕事は徹底的に納得のいくまでがんばってやりたい	-0.15	-0.13	0.02	<b>0.77</b>	0.20	0.01
目標を決めて勉強をはじめたら、困難があっても克服してがんばりたい	0.19	0.13	0.00	<b>0.66</b>	-0.17	0.05
学校の成績がよくなるように、もっとしっかり勉強したい	0.10	0.05	-0.16	<b>0.47</b>	-0.11	0.07
顕示欲求 ( $\alpha = .68$ )						
異性から、自分が魅力的な人だと思われたい	0.10	0.00	-0.04	-0.08	<b>0.74</b>	-0.09
グループ活動の決定は自分がやりたい	-0.12	0.16	-0.04	0.07	<b>0.58</b>	0.08
友達や先生からスゴイと思われるようなことがしたい	0.25	0.09	0.02	0.22	<b>0.37</b>	0.05
拒否回避欲求 ( $\alpha = .66$ )						
友達からいじめられないようになりたい	0.12	0.03	0.05	-0.06	-0.02	<b>0.66</b>
お互いに親切で、仲のよいグループに加わりたい	0.32	-0.05	0.08	0.13	-0.07	<b>0.52</b>
先生から怒られないようにしたい	-0.06	-0.07	-0.01	0.19	0.04	<b>0.44</b>

表 4-4 学校領域各因子相関行列 (N=318)

因子	1	2	3	4	5	6
1	1.00					
2	0.13	1.00				
3	0.07	0.42	1.00			
4	0.44	-0.07	-0.30	1.00		
5	0.53	0.35	0.23	0.21	1.00	
6	0.61	0.18	0.06	0.40	0.42	1.00

ると、第 1 因子のキレ行動では教職員が判断したものと項目内容が全て一致したものの、非身体的攻撃行動と対処行動で異なる部分があった。しかしながらその内容をみると第 2 因子の「非身体的攻撃行動」は教職員が判断した非身体的攻撃行動の 7 項目から負荷量の

低かった「相手を怒鳴りつける」「相手をにらみつける」の 2 項目を除いたものである。また、対処行動については、第 3 因子と第 4 因子を合わせると教職員が判断した対処行動にあてはまる。つまり教職員が判断した対処行動は「積極的対処」と「怒り抑制」に二分して考えることが出来るということである。各因子と教職員が判断した行動項目との内容の間には大きな差異は見られなかったため、以下の分析では因子分析で得られた 4 因子を対象とする。

#### 〈各変数の平均得点における性差〉

各欲求、各行動の合計得点をそれぞれの項目数で割った平均得点を算出し、性差が見られるかどうか t 検定により比較した結果 (表 6)、欲求については「学

表 5-1 怒り行動尺度因子分析結果 (N=318)

	因子 1	因子 2	因子 3	因子 4
キレ行動 ( $\alpha=.87$ )				
パニックになる	<b>0.78</b>	-0.10	0.33	-0.05
頭にきて、気持ちに任せて取り乱す	<b>0.76</b>	-0.10	0.10	-0.05
腹が立つと、何もわからなくなる	<b>0.73</b>	-0.12	0.15	-0.08
ひどく腹が立って乱暴する	<b>0.66</b>	0.11	-0.17	0.12
怒り狂う	<b>0.66</b>	0.16	0.04	-0.11
カッとなって我慢できなくなる	<b>0.62</b>	0.13	0.03	-0.14
腹を立てて、人をける	<b>0.46</b>	0.23	-0.24	0.16
人を殴る	<b>0.38</b>	0.22	-0.32	0.13
非身体的攻撃行動 ( $\alpha=.72$ )				
相手が嫌がるような噂話をする	-0.19	<b>0.80</b>	0.29	-0.08
相手を精神的に追い込むようなことをする	-0.02	<b>0.66</b>	-0.01	-0.06
相手がやっていることを邪魔する	0.02	<b>0.56</b>	0.04	-0.04
口汚くののしる	0.07	<b>0.52</b>	0.01	0.06
皮肉や悪口を面と向かって言う	0.19	<b>0.39</b>	-0.01	0.02
積極的対処行動 ( $\alpha=.66$ )				
相手に自分の気持ちを伝えようとする	0.28	0.01	<b>0.57</b>	0.17
友達としゃべって気分転換する	0.10	0.07	<b>0.56</b>	0.07
楽しいことを考える	0.00	0.11	<b>0.54</b>	0.03
友達や家族にそのことを相談する	0.08	0.02	<b>0.51</b>	-0.02
気を静めて、相手を理解しようとする	-0.13	0.01	<b>0.39</b>	0.26
怒り抑制行動 ( $\alpha=.71$ )				
気持ちを静めて、かんしゃくを起こさないようにする	-0.04	-0.04	0.09	<b>0.80</b>
怒りを抑えようとする	-0.16	-0.02	0.14	<b>0.53</b>

表 5-2 怒り行動尺度因子相関行列 (N=318)

因子	1	2	3	4
1	1.00			
2	0.66	1.00		
3	-0.19	-0.27	1.00	
4	-0.09	0.00	0.11	1.00

校親和欲求」,「学校拒否回避欲求」,「家庭親和・愛情欲求」において有意差が見られ,男子に比べて女子の方が高かった。怒りに対する行動については,「積極的対処行動」においてのみ有意差が見られ,男子に比べて女子の方が怒りに対して積極的に対処することが多かった。「キレ行動」について有意な性差は認められなかった。

本調査目的はキレ行動と欲求との関係を明らかにす

表 6 各欲求,各怒り行動得点の平均と SD

	全体 (N=318)		男子 (N=168)		女子 (N=150)		t 値
	平均	SD	平均	SD	平均	SD	
学 校 親 和	3.44	0.88	3.27	0.89	3.63	0.83	-3.76**
学 校 攻 撃	2.59	1.07	2.67	1.04	2.50	1.10	1.48
学 校 気 楽	3.43	0.97	3.52	0.98	3.34	0.95	1.64
学 校 達 成	3.23	0.94	3.18	0.95	3.28	0.93	-0.98
学 校 顕 示	2.59	0.90	2.55	0.88	2.64	0.91	-0.96
学 校 回 避	3.45	1.03	3.33	0.97	3.58	1.08	-2.19**
家庭親和・愛情	2.93	0.83	2.81	0.84	3.06	0.80	-2.77**
家庭自由・攻撃	3.08	0.86	3.07	0.82	3.08	0.90	-0.14
家庭承認・独立	2.92	0.86	2.89	0.85	2.95	0.87	-0.63
キ レ 行 動	1.90	0.69	1.89	0.72	1.91	0.67	-0.19
非身体的攻撃	1.94	0.61	1.98	0.63	1.90	0.59	1.25
積極的対処	2.57	0.63	2.44	0.65	2.71	0.58	-3.90**
怒 り 抑 制	2.67	0.85	2.70	0.91	2.63	0.78	0.67

\*\* $p<.01$

ることであり、「キレ行動」で性差は見られなかったことから、その後の分析では性差は扱わず男女全体を分析対象として行なうこととする。

#### 〈各行動を目的変数、各欲求を説明変数とした重回帰分析結果〉

因子分析によって得られた怒りに対する4種類の行動をそれぞれ従属変数とし、9つの欲求を独立変数としてステップ・ワイズ方式による重回帰分析を行った。その結果、欲求の強さでの弁別はキレ行動と非身体的攻撃行動における両領域の攻撃欲求の強さで認められただけであった。欲求の強さでの行動の弁別は明確なものにならなかったことから、キレ行動とその他の行動との関係を欲求の種類で見ていくことにする。

図4に各欲求と各行動の関係について、重回帰分析結果における偏回帰係数と、怒りに対する行動の因子分析結果におけるキレ行動との因子間相関を示した。怒りに対する行動毎に見ると、キレ行動に関係していた欲求は「学校攻撃欲求」と「家庭自由・攻撃欲求」であった。非身体的攻撃行動についてもキレ行動と同じく「学校攻撃欲求」と「家庭自由・攻撃欲求」が関係していたが、その標準偏回帰係数および説明率（ $R^2$ 乗）は非身体的攻撃行動（ $R^2$ 乗＝0.238）よりキレ行動（ $R^2$ 乗＝0.307）の方で高く認められた。積極的対処行動に関係していた欲求は「家庭親和・愛情欲求」、「学校親和欲求」、「学校攻撃欲求」（負の影響）、「学校達成欲求」であったのに対して、怒り抑制行動では説明率は低いものの（ $R^2$ 乗＝0.073）、「家庭自由・攻撃欲求」（負の影響）、「家庭承認・独立欲求」、「学校達成欲求」が関係していた。

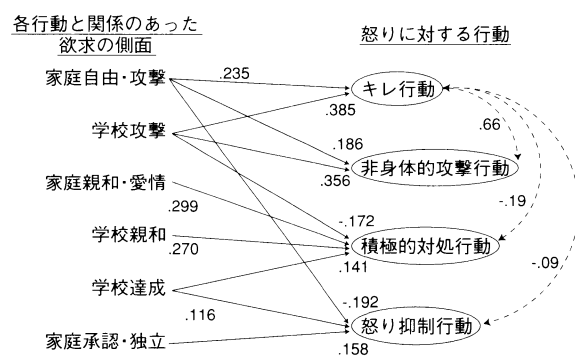


図4 本調査における各欲求と各行動の関係  
(実線値は重回帰分析により得られた標準偏回帰係数、点線値は因子分析（プロマックス回転）により得られた因子間相関）

## 考 察

### 1. キレ行動とその他の怒りに対する行動について

予備調査1と本調査因子分析結果より、キレ行動は相手との関係についての意識が乏しく激しい怒りの感情を制御することが困難な状態で特に直接的攻撃行動を伴うものであることが考えられる。それに対し非身体的攻撃行動は、キレ行動の直接的で激しさを伴う行動とは少し異なり、戦略的で陰湿な攻撃行動であり相手との関係については意識されているものと考えられる。キレ行動と非身体的攻撃行動の因子間相関をみると中程度の正の相関が示されていたことから、キレ行動を起こしやすい生徒は非身体的攻撃行動も起こしやすいということが考えられる。

対処行動については教職員が判断したものからさらに分化して「積極的対処行動」と「怒り抑制行動」が抽出された。つまり一括りに対処行動と言っても相手との関係改善へ積極的に向かおうとする外向きのものと感情を抑える事で関係を維持しようとする内向きのものがあることがわかる。キレ行動との因子間相関をみると、キレ行動と積極的対処行動が負の関係を示さなかったことから、それらは相反するものであるとはいえず怒りを感じた時に積極的対処行動を起こすこともあればキレ行動を起こすこともあるという生徒の存在が示唆された。また、怒り抑制行動との関係について、まずキレ行動と怒り抑制行動の平均を比べるとキレ行動の頻度はそれほど高くないが怒り抑制行動はそれよりも頻度は高かった。このことから中学生は大石（1998）が言及していたキレの起因である「慢性的な我慢の状態」にあることが示唆される。しかしながらキレ行動と怒り抑制行動には相関はないことが示されたことから、怒りを抑制し行動化しないように我慢しがちな生徒が常にキレ行動を起こしやすいとは言えないことが示唆された。

### 2. 中学生の欲求の傾向

本調査で得られた欲求尺度の度数分布に偏りがあったものを見ると、自己に注意が向くことを求める項目の評定において低く偏っており、大石（1998）が指摘した「周囲との同質化」に示されるように「みんなと同じでなければならない。同じであったほうがいい。むしろ注目されることは恥ずかしいことだ」という意識が中学生に強いことが考えられる。その一方で、「本当によい友達を作りたい」という項目の評定にお

いても高く偏っていたことから、「みんなと同じであった方がいい」という反面、本当は異質な部分を持つ自分も認めてくれるような「本当の友達」を多くの中学生は求めていることがうかがえる。各欲求の平均得点を見ると「学校親和欲求」、「学校拒否回避欲求」が他に比べて高く、このことから対人関係、特に友人関係において温かさを求めていることがわかる。また「学校気楽欲求」の平均点は他に比べると高く、中学生は時間的、精神的なゆとりを求めていることがわかる。ただしこれは中学生を取り巻く環境にストレスが多くあるということも考えられるだろうが、やるべきことや目の前の現実から逃れたいという怠惰の気持ちの強さや決められた事に対する向上心の弱さを示しているとも考えることもできる。

### 3. 各変数の性差について

各変数の平均得点で有意な性差が認められたものから、男子に比べて女子の方が友好的な対人関係を求める気持ちが強く、友好的な関係を目指した行動をとることが多いことが示された。対人関係において女子の方が信頼の共有や協調性を重視し情緒的であることが様々な研究で報告されている（例えば Maccoby, 1990）。このことから、女子の方が友達との関係や家族との関係で温かさを求める気持ちが強くそれを目指した行動をとることが多かったのは、共有、協調の関係の中で互いに求めるものが強くなるという女子の特徴であると考えられる。

一方、一般的に男子の方が攻撃的であるといわれている中、本調査結果では攻撃欲求、キレ行動、非身体的攻撃行動に性差は見られなかった。東（1997）は性差についてのメタ分析について概観した中で、男性の方が攻撃的であることを示している一方で、性差の大きさにおける時代の傾向をみた研究をみると「どちらかと言うと性差は減少する」という傾向がみられたという。そのことを考慮すると、攻撃欲求、攻撃行動に性差が見られなかったという今回の結果は現代の特徴であると考えことができ、このような傾向には最近の性役割観の変化が関係している可能性があると推察できる。

### 4. キレ行動と欲求との関係について

重回帰分析結果より、攻撃欲求に関してはキレ行動が非身体的攻撃行動よりも強い関係を示し、対処行動で反対の方向に関係していることがわかった。従って怒りに対する行動4側面に対して欲求の強さで弁別可

能であったのは「攻撃したい」という思いの強さだけであり、その他の欲求の強さでの行動の弁別は明確なものにならなかったことから、キレ行動とその他の行動との関係を欲求の種類で見ていくことにした。

キレ行動に関係する欲求と非身体的攻撃行動に関係する欲求は同じで「学校攻撃欲求」と「家庭自由・攻撃欲求」であったが、標準偏回帰係数を比較するとキレ行動の方が強く関係しており、また説明率（ $R^2$  乗）もキレ行動の方で高かった。つまりキレ行動と非身体的攻撃行動には同じ攻撃欲求が関係しているが、その結びつきはいずれもキレ行動の方が強いことがわかる。特に「家庭自由・攻撃欲求」についてみると、若干キレ行動の方に強く関係しており、その内容を見ると自由気まま、我がままな状態を表していることがわかることから、非身体的攻撃行動に比べてキレ行動には自由を求めたり我がままを通したいという思いがより関係していることがわかる。つまり非身体的攻撃行動と比較すると、自由気ままに我がままを通したいという思いが強いほど欲求不満な状態を感じやすくさせ、怒り感情の制御を困難にし直接的で衝動的なキレ行動を起こさせるということが推察できる。

積極的対処行動に関係していた欲求から、相手との関係をよいものに改善させるために行なう積極的対処行動には主に相手との関係を温かいものにしたいという気持ちの強さが関係していることがわかる。しかしながらキレ行動との因子間相関はほとんどなかったことから、積極的対処行動に関係する欲求の強まりがキレ行動を起こさせないということは一概には言えないことが推察される。怒りに対して上手く対処できているにもかかわらずキレ行動を起こす事があるというこの背景には、怒りを生じさせた相手やきっかけ、その時の状況や個々の社会的スキル等がさらに関わってくるものと考えられる。吉村（2003）は社会的スキルと攻撃性に関して「感情統制のスキルが未熟な人ほど敵対的な認知をしがちでカッとなりやすく、身体に対する暴力的な行為をとりやすい」という結果を見出した。つまり、周囲との関係を温かいものにしたいと思っていても、個人の感情統制のスキルがそれに伴って発達していなければ、ここで言うキレ行動にも含まれる身体的な攻撃行動に至ってしまう、ということが考えられる。キレ行動に関する要因を明らかにしていくためには今後これらの変数との関係について検討することが必要になると考える。

怒り抑制行動に関係していた欲求から、怒り感情を表出しないように自分の中で食い止めようとする怒り

抑制行動には主にいい子でありたいという気持ちの強さが関係していることがわかる。キレ行動との因子間相関はほとんどなかったことから、怒りを抑制しがちな生徒の中にはキレ行動を起こす生徒もいれば抑制したまま行動化しない生徒もいるということがわかる。今の自分を認めてほしいと思って欲求不満を感じたとしても、周囲が望むいい子でいたいという気持ちがあるが故に不満やネガティブ感情を上手く外に出すことを困難にし内に溜め込んでいった挙句にキレ行動を起こすということも考えられる。そこには彼らの消極的な対人行動や、嫌われたくない、批判されたくないなど自分の感情を表出することによって生じるとと思われる自己の傷つきを恐れていることが背景として考えられる。すなわち、怒りを抑制する行動は教員内では怒りに対して上手く対処できている行動であると判断されたが、それに関わっている欲求を考慮すると怒りに上手く対処できている行動とは考え難く、そのような抑制を繰り返している状態に他の変数が加わり突然キレ行動に至る可能性を秘めていることが示唆される。それはいわゆる「普通の子が突然キレる」ということにつながる結果であることが考えられ、むしろ怒り抑制行動をとりがちな生徒がキレる予備軍になりうるということを示唆している。宗像（1998）はイイ子が「キレ」ることについて「これまでのイイ子が続ける心（自己防衛心）とそんな自分に自己嫌悪を感じもっと強くなりたい心（自己成長心）が葛藤し、苦しむことになる」が故にその苦しみや辛さを刺激するものから逃れようとすると述べており、これは今回得られた中学生の消極的な対人関係にも繋がるものと考えられる。またこのように考えると Berkowitz のモデルでの「回避行動」が怒り抑制行動であると考えることができよう。この苦しみへの恐怖心を持ちそれに立ち向かう強さを養うために宗像（1998）は本人の自己効力感をもたせることの重要性を指摘している。「思い通りにしたい最も基本的な要求とは重要他者に「認められたい、愛されたい」とか「自分を認め信じたい」、「人を認めたい、愛したい」という要求である」と宗像（1998）は述べており、これらの要求が満たされることによって自己効力感が養われていくと考えられる。怒り抑制行動をとりがちな生徒に対しては特にこれらの要求を満たせるような環境をつくることで彼らがキレてしまうことを防ぐことに繋がると考える。

各行動の弁別が欲求の強さでできるだろうという仮説は攻撃欲求においてのみ支持されたが、欲求全体では明確にならなかった。また欲求の種類で見た時にキ

レ行動と非身体的攻撃行動の区別が他の欲求の影響という形では明らかにならなかった。これらのことに関して、もともとキレ行動を起こす生徒が少なかったことも関係すると考えられるが、欲求項目の内容が関係していると考えられる。本研究で欲求の強さが不満状態と正の関係を成すと考えられることができるだろうということで作成した欲求尺度であったが、結果を検討するとそれぞれの思いの強さ是不満な状態を意味しているところでもできれば、単なる思いの強さを表しているだけでそこで不満を感じているかどうかは判らないということも言え、方法論的な問題が生じていたことが考えられる。本研究では主に標準化された EPPS をもとにして欲求尺度を作成したが、時間的な制約や調査対象側の制約によりその妥当性は検討することができず、今後欲求尺度の妥当性を検討することが必要である。

## 5. 今後の課題

重回帰分析結果よりそれぞれの重回帰式の説明率（ $R^2$  乗）が低かったことから、それぞれの行動には欲求以外の他の変数がさらに関係していることが大いに考えられる。また、積極的対処行動がキレ行動とほとんど相関を示さなかったことから、キレ行動を起こさないようにするためには単に対処行動だけに目を向けるのではなく、怒り感情を生じさせる状況要因や個々の社会的スキル、自己効力感との関係も考慮して今後検討していく必要があると考えられる。そして、キレが場の状況と関係が深いことやキレ行動を起こす頻度が少なかったということ、攻撃性や攻撃行動に対する社会的望ましさの影響を考えると、質問紙調査では限界があることが考えられる。今後観察法研究等により個々のケースを分析していくことでキレることに関してより明確に捉える必要があるだろう。

## 引用文献

- 安藤明人・曾我祥子・山崎勝之・島井哲志・嶋田洋徳・宇津木成介・大芦 治・坂井明子 1999 日本版 Buss-Perry 攻撃性質問紙 (BAQ) の作成と妥当性、信頼性の検討 心理学研究, 70(5), 384-392.
- 東清和 1997 ジェンダー心理学の研究動向 ―メタ分析を中心として― 教育心理学年報, 36, 156-164.
- ドラード, J. 他 宇津木保 (訳) 1959 欲求不満と暴力 誠信書房
- Edwards 1970 EPPS (Personal Preference Schedule) 性格検査手引き 肥田野直他訳編 日本文化科学社
- 濱口佳和 2002 反応的・道具的攻撃性尺度 (児童用) の作成―キレ傾向とイジメ傾向の個人差の測定― 日

- 本教育心理学会第44回発表論文集, 496.
- 秦 一士 1999 敵意的攻撃インベントリーの作成 心理学研究, **61**(4), 227-234.
- 磯崎万貴子 2002 現代小・中学生の基本的欲求について 甲南女子大学文学部人間関係学科卒業論文
- 河合隼雄 1998 少年非行の深層 臨床心理士報, **9**(2), 17-31.
- 国立教育政策研究所内「発達過程研究会」2002「突発性攻撃行動および衝動」を示す子どもの発達過程に関する研究-「キレる」子どもの生育歴に関する研究-
- 久木山健一・伊藤崇達・神藤貴昭・斎藤誠一・柳原利佳子・原田 實・山口昌澄・下坂 剛・西田裕紀子・榎本千春・木村朋子・藤井智子・石田良一 2001 現代青少年の「キレる」ということに関する心理学的研究 (3)-キレ衝動抑制方略尺度作成の試み- 神戸大学発達科学部研究紀要, **9**(1), 9-17.
- 小林万洋 1998 最近の少年たちの変化をどう見るか-いわゆる「キレる」中学生の心理とその対応について 青少年問題, **45**(7), 23-27.
- Maccoby, E. 1990 Gender and relationships. *American Psychologist*, **45**, 284-294.
- 牧田浩一・阪 武彦・田中雄三 2000 中学生の「むかつき」「キレる」現象に関する意識調査 九州神経精神医学, **46**, 189-195.
- 牧田浩一・阪 武彦・田中雄三 2002「むかつき」「キレる」現象と攻撃性との関連性及び SCT (文章完成法テスト) の特徴 九州神経精神医学, **48**, 15-27.
- 松本良枝 2001 キレる非行の発生メカニズム 心理学ワールド, **14**, 9-12.
- 三好 稔(編) 1988 新訂版基本的欲求検査手引き 東京心理株式会社
- Murray, H. A. (外林大作 訳) 1967 パーソナリティー I 誠信書房
- 宗内 敦 1998 キレる 中学教育 (12月号) 小学館
- 宗像恒次 1998 ストレスで「キレる」イイ子の心の教育 (特集心の教育) 教育と医学, **46**(4), 314-322
- 中島義明・安藤清志・子安増夫・繁舩算男・立花政夫・箱田裕司(編) 1999 心理学辞典 有斐閣
- 成田雅子・多田志麻子 2001「キレる」ことに及ぼす要因について 児童臨床研究所年報, **14**, 36-44.
- 大石英史 1998 “キレる”子どもの心理的メカニズムに関する一考察 山口大学教育学部研究論叢 (第3部), **48**, 109-121.
- 大淵憲一 2000 教養講座 攻撃性の社会心理学③ 衝動的攻撃の心理過程 刑政, **111**(7), 76-87.
- 崔 京姫 1998 キレ衝動尺度作成の試み 筑波大学発達臨床心理学研究, 9-10. 55-58.
- 斎藤 勇・荻野七重 1994 性格特性と欲求・行動との関連性の研究 立正大学教養部紀要, **28**, 350-318.
- 斎藤 孝 1999 子どもたちはなぜキレるのか 筑摩書房
- 柴田ふき・姉小路園生・越智啓太 2002 衝動的攻撃性尺度の構成-衝動的攻撃性に関する研究 (1)-日本心理学会第66回大会発表論文集, 899.
- 下坂 剛・西田裕紀子・斎藤誠一・伊藤崇達・神藤貴昭・柳原利佳子・鶴田弘子・久木山健一・西田紀子・西村亜希子・榎本千春・坂本由佳・前川雅子 2000 現代青少年の「キレる」ということに関する心理学的研究 (1)-キレ行動尺度作成および SCT による記述の分析- 神戸大学発達科学部研究紀要, **7**(2), 1-8.
- 鈴木 平・春木 豊 1994 怒りと循環器系疾患の関連性の検討 健康心理学研究, **7**, 1-13.
- 田中宏二・東野真樹 2003 わが国における「キレる」という現象に関する心理学的研究の動向 岡山大学教育学部研究集録, **124**, 79-85.
- 東京都(編) 1999 キレる-親, 教師, 研究者, そして子どもたちの報告-ブレーン出版
- 山入端津由 1998「キレる」かたちの暴力 青少年問題, **45**(7), 40-45.
- 山崎勝之・鳥井哲志(編) 2002 攻撃性の行動科学-発達・教育編 ナカニシヤ出版
- 吉村 英 2003 社会的スキルと攻撃性-女子大学生を対象とした共分散構造分析- 脅威器楽・心理学論叢 京都女子大学大学院文学研究科研究紀要 **3**, 87-111
- 和田志麻・加藤和生 2003「キレ」の素朴概念の質的分析 九州大学心理学研究, **4**, 177-186.

付表1 怒り行動尺度 (本調査)

1. 気を静めて、相手を理解しようとする
2. 相手をどなりつける
3. 腹を立てて、人をける
4. 腹が立つと、何もわからなくなる
5. 楽しいことを考える
6. 皮肉や悪口を面と向かって言う
7. 相手をにらみつける
8. 怒りをおさえようとする
9. 頭にきて、気持ちにまかせて取り乱す
10. 気持ちを静めて、かんしゃくを起さないようにする
11. ひどく腹が立って乱暴する
12. 相手が嫌がるようなうわさ話をする
13. そのできごとを忘れようとする
14. 口汚くののしる
15. 怒りくるう
16. 自分がキレた後の相手のことや自分のこと、周りの人のことを考える
17. 相手を精神的に追い込むようなことをする
18. カッとなって我慢できなくなる
19. 友達としゃべって気分転換する
20. 相手がやっていることを邪魔する
21. 人をなぐる
22. 相手に自分の気持ちを伝えようとする
23. パニックになる
24. 友達や家族にそのことを相談する